

## 「震災の中での希望」

菊田行佳

17 「わたしはあなたを多くの民の父と定めた」と書いてあるとおりです。死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神を、アブラハムは信じ、その御前でわたしたちの父となったのです。・・・25 イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」

ローマ人への手紙4章17, 25節

東日本大震災が起きた時、私は横浜のとある県営住宅で、家族三人で暮らしていました。当時テレビがなかったので、震災の情報はもっぱらインターネットを通して収集していました。震災の甚大な被害に対する憂いもありましたが、何よりの最大の関心事は、福島原発のことです。放射能が風に運ばれて、私たちの住んでいる所にやってくることを何より心配し、まず小さな我が娘の身の安全のことが、何よりも気にかかっていました。同じように子どもの身の危険を心配し、親戚を頼って遠くに非難して行く人も何人かいました。それは、我が身内だけ助かりたいとするようで、何ともずるいようにも思えましたが、いざ自分の子どものことを思うと、そのような誘いがもしその時あったなら、もしかしたら自分もお願いしていたかも知れません。その時は、震災に遭われた人々のことを思うより、自分の家族、自分の命を第一に考えていたというのが、正直なところです。

震災から2年が経とうという今、私たち家族は遠く愛媛県に住んでいます。ここでは、教会同士の横の繋がりで、被災地の人々を支援する活動が為されています。私もその活動に参加する機会が与えられて、仙台市で津波の被害があった荒浜地区に、ボランティア活動をしてきました。津波ですべての住宅が流されてしまった海岸近くの住宅地で、その中の一軒の住宅跡で整地の作業をしていました。この地区で残った建物は、4階建ての小学校の校舎だけです。そこには、支援活動をしている人々への感謝の気持ちを記した大段幕が、校舎の窓ガラスに掲げられています。その3階部分まで、津波が達していたことが、見てすぐにわかります。すると、ボランティアを案内してくれるスタッフの方が、ある話をしてくれました。地震が発生した時、ちょうどその時は、子どもたちの下校時間でした。地震の揺れが治まったので、子どもたちを家に帰していたところ、ある教職員の方が、嫌な予感がして、一端下校させた子どもたちを追いかけて、全員校舎に連れ戻したとのことでした。すると、あの大津波が来ましたが、皆校舎の屋上に上って、全員無事だったとのことでした。しかし、学校を病気か何かで欠席して、家に残っていた子どもは、何人かなくなるとのことです。この話を聞いて、大惨事の中にでも助かった子どもがいたことを喜ぶ思いと、やはり亡くなった子どもがいたことへの複雑な気持ちが交差しました。そもそも、このような大勢の命が一举に失われてしまう状況を前にして、何が良くて、何が悪かったなど、やはり言えないのではないかと思います。もし、自分の子どもが津波にのまれた一人だったら、私はいったいどのようになってしまうのだろうと考えます。一人のキ

リスト教の信仰者として、そして教会に教師として、私はこの大震災に対していったい何が言えるのかと、自分に問わざるをえません。

そのような、問いは自分でなくても、やはり誰もがするものでありました。ボランティアの終わった後、反省会のような機会がありましたが、そこで、やっぱりというか、必然的だったというか、ある青年が一つの問いを投げかけました。「神さまがいるのだとしたら、どうしてこんなにひどいことをするのだろうか？」これは、自分の中でも幾度もなく問いかけたもので、でもそれを口にするのが怖くてためらっていたものでした。私は、その時まで、一人の信仰者として、自分なりにその答えのようなものを、いろいろと考えてきましたが、結局、その場で発言することは出来ませんでした。そこでは議論の場ではないから、他の人の発言に意見を返してはダメ、というルールがありました。しかし、実際はその問いかけに、みんなの前で答える勇気がなかったというのが、本当のところですよ。何か自分が逃げてしまったようで、ずるいじゃないかと自分を責める一方で、これも自分なんだとあきらめる思いが交差します。そんなことを悶々と考えながら、宿泊所の近くの銭湯に行くと、先ほどの青年が後から入って来ました。私は彼に声をかけて、先ほどのあなたの問いに、一人の信仰者として、そして教師として答える責任があると思うので、答えさせてほしいと言いました。その後は、夢中で話したので、自分でも何を話したのか細かいところはよく覚えていませんが、こういうことを話しました。「自分が、誰もが納得してくれるような答えを持っているわけではない。だから、自分も死ぬまで、その答えを求めて問い続けて行くしかないと思っている。ただ、今の自分が思うことは、何で、神さまはこんなひどいことをするのかという問いよりも、何の理由もなく、何の意味もなく、こんなひどいことが起こったということの方が、自分には耐えきれないことなんだ。神さまが、何かの罰でこのようなことを起こしたとか、積極的に地震を起こしたとは考えない。でも、やはり、神さまの御手の中でゆるされ、このことが起こったことは確かなんだと信じている。どうしてそうなのかはわからないけど、神さまが支えるこの世界のことなんだからだとしか言いようがない。ただ、自分は、神さまは、きっとこの地上で失われたすべてのいのちに、新しいいのちを与えてくれるという復活信仰を信じている。死者にいのちを与え、存在していないものを存在させる神さまの力を、本気で信じているんだ。」そのような言葉を、私はその青年に語っていました。そして、最後に、こう言いました。「神さまがいるのなら、どうしてこんなひどいことをするのかという問いは、やはり、自分で直接、神さまに向かってするしかないと思う。自分から言えることは、その問いを続けて行く限り、必ず神さまは答えてくれるはずだということなんだ。」そのように言って、長い時間湯船の中に引き留めたことをお詫びしながら、その青年とは別れました。この青年に語ったことは、私のぎりぎりのところで出てきた言葉で、自分でも嘘はないと思っている、誰に聞かれても同じように答えるしかないと考えています。このことを、大震災から2年経とうという時、今回は話させて頂きたいと思いました。